

アジア／太平洋におけるソーシャルワーカーのカルチュラル・コンピテンスの開発**－ 日本と韓国を中心に －**

東京福祉大学社会福祉学部 姜 壽男 (8504)

キーワード：カルチュラル・コンピテンス、ソーシャルワーカー、多文化

1. 研究目的

アジア・太平洋の諸国における国際化や経済グローバル化は、経済・産業を発展させ国民の生活水準の向上を齎した一方、国際結婚の急激な増加や移住労働者及びその家族の滞在化による数多くの社会問題を生み出している。異なる文化を背景に持つ国際結婚による様々な家族問題、言葉や生活習慣、価値観の違いから生じる育児の不安やこどもの虐待、ドメスティック・バイオレンス、うつなど、生活問題は多様化・複雑化・深刻化している。また、経済発展による貧富の格差や環境問題、弱者に対する福祉や人権保障等、新たな社会問題への対応も必要としている。こうした国際的に注目される社会問題は、ソーシャルワークの観点から考える必要がある。多様な文化的背景から生じる様々な社会的・国際的問題に対応できるソーシャルワーク教育の専門性とスキルを拡充していくことは不可欠である。すなわち、文化的背景をもって発展してきたソーシャルワークの担い手として、ソーシャルワーカーのカルチュラル・コンピテンスは極めて重要である。

ソーシャルワークにおけるカルチュラル・コンピテンスの概念は、建国初期から積極的に移民を受け入れてきた多文化国家と言える北米のようにカルチュラル・コンピテンスに基づいた多文化ソーシャルワークとは違い、日本を含むアジア諸国においては、カルチュラル・コンピテンスの概念はまだ馴染んでいないことばである。先行研究を調べても、北米では数多く研究されているが、アジア諸国では少数に過ぎない。昨今は、国際結婚や移住者の増加により、様々な問題の背後にあるクライアントの多様な文化に配慮したソーシャルワーカーのカルチュラル・コンピテンスが求められるようになった。

そこで、本稿ではカルチュラル・コンピテンスの概念を定義し、それに基づいた文化的認識・文化的知識・文化的技術・文化的価値と態度の4つの構成要素を用いて、アジア・太平洋の諸国の社会環境にマッチしたソーシャルワーカーのカルチュラル・コンピテンスを開発することを研究の目的とする。

2. 研究の視点および方法

ソーシャルワーカーのカルチュラル・コンピテンスの構成要素は、研究者や研究分野によって複雑な要素で構成されている。本研究では、ソーシャルワーカーのカルチュラル・コンピテンスを、①文化的認識、②文化的知識、③文化的技術、④文化的価値・態度の4つを用いて、まず、文献研究を行い、続いて日本と韓国を比較調査しながらアジア・太平洋の諸国に広げて研究を進めていくこととする。

3. 倫理的配慮

本研究は社会福祉学会研究倫理指針に則り、文献研究によって行う。その使用に関し、引用参考等を厳密化し、倫理的配慮を行った。なお、引用・参考文献は当日配布する資料に明記する。

4. 研究結果

カルチュラル・コンピテンスとは、ソーシャルワーク辞典によると(The Social Work Dictionary 5th Edition by Robert L. Barker)、「多様な社会民族的な背景から、知識、態度、理解、自己認識、有効な実践スキルを持ち、クライアントにサービスを提供する専門職の人」と定義している(2003 by the NASW Press)。

NASW は(2001、2007)、「異文化状況において、システムや機関、または専門家が効果的に働く行動、態度、政策に集合することである」と説明し、ソーシャルワーク実践におけるカルチュラル・コンピテンスとは、クライアントの独特さを尊重し、彼らを取り巻く社会の中で、彼らのユニークさをいかにうまく折り合わせねばならないかということを十分に理解することであると定義している。また、NASW の倫理コードでは(2003)、文化的能力と社会的多様性は、次の3つのコンポーネントを持っている。つまり、①ソーシャルワーカーは、文化とすべての文化に存在している強みとその機能を理解しておく必要がある。②彼らはクライアントの文化や文化的なグループ間の相違についての知識を持っている必要があること。そして、③彼らは、教育とすべての文化的なグループのための社会的多様性と抑圧の性質について理解を求めべきであると示唆している。

以上のことから、本稿では、ソーシャルワークにおけるカルチュラル・コンピテンスとは、ソーシャルワーカーの文化的認識、多様な文化的背景を持つクライアントに対しての具体的な知識と理解、クライアントとの相互作用による効果的な介入技術を通して統合的・実践的に遂行する能力であると定義する。

5. 考察

カルチュラル・コンピテンスの構成要素を先行研究からレビューしたが、多くの研究は北米の研究者によるものである。こうした北米から研究されたものをアジア諸国にマッチするカルチュラル・コンピテンスの開発は重要である。アジア諸国の中でも様々な文化の差がある。日本と韓国は隣国にしながら、生活習慣や文化はまったく違う。人は、自分の国の文化は良くて、慣れていない他の文化は排他的になりがちがあるかもしれない。特に、ソーシャルワーカーは自分とは違う文化を持っているクライアントを支援する際に、クライアントの文化を認め、尊重する姿勢はかけていると、クライアントの信頼を得ることはできないだろう。